

完新世海進期における厚岸町周辺の塩性湿原域拡大範囲復元に関する研究

国際日本文化研究センター 那須浩郎

独立行政法人 産業技術総合研究所 活断層研究センター 澤井祐紀

厚岸湖の湖岸や別寒辺牛川の河口には、塩性湿地とよばれる特殊な環境があります。この湿地では、高層湿原のような普通の淡水湿原とは違って常に海水の影響を受けているため、海水に浸っても生育できる特殊な植物（塩生植物）だけが生育することができます。「アッケシ」の名の付くアッケシソウやシバナなどがその代表種ですが、現在その数はだんだんと減ってきており、貴重な存在になっています。厚岸町の水鳥観察館の玄関前には、そのアッケシソウが植栽されていますが、見たことはありますか？アッケシソウは今では厚岸湖の湖岸に生育していますが、実は1000年ほど昔には、アッケシソウが実際に水鳥観察館の周辺に生育していたことが今回の私たちの調査で分かりました。

水鳥観察館の周辺の別寒辺牛川流域には広大な低層～中層湿原が多くありますが、この湿原の地下に埋まっている泥炭層を掘り出してみると、昔の植物のタネや葉っぱ、微小な藻類（ケイソウ）などがたくさん見つかります。その種類を顕微鏡で詳しく調べると、昔の海岸線の様子や当時生育していた植物の様子を知ることができます。このような方法を用いて、私たちは、厚岸町周辺では「塩性湿地」が昔はどの辺りまで拡大していたのかを調べようとしています。

今回は、別寒辺牛川の支流の大別川とチライカリベツ川流域の2地域で、それぞれ現在は湿地林になっている場所の泥炭層や粘土層を掘り出して調べました。現在は湿地林になっている場所でも、過去には塩性湿地だった可能性が考えられたからです。出てきたタネや葉っぱの種類を調べて時代ごとに見ていくと、過去1000年間の間に大別川流域で2度、チライカリベツ川流域で1度、塩性湿地が拡大していたことが分かりました。しかもそれぞれの塩性湿地では、生育していた植物の種類が違っており、大別川流域ではシバナ、ウミミドリ、ヒメウシオスゲという種類の塩生植物が多く、チライカリベツ川流域の方では、アッケシソウ、エゾツルキンバイ、ヒメウシオスゲ、クロハリイという塩生植物が多かったことが分かりました。このことは、1000年ほど昔には、海が現在の水鳥観察館あたりまで侵入してきた時代があり、周囲の湿原は塩性湿地になっていましたが、場所によってはアッケシソウが生育していたり、シバナが生育していたりと様々だったことを示しています。アッケシソウやシバナなどの塩生植物が将来どのように生育域を拡大したり縮小したりするのかを予測するためにも、過去のそれぞれの生育地を調べることが重要だと考えられます。